



人間の幸福

Miyamoto Tetsu

宮本輝

幻冬舎文庫

## 人間の幸福

---

もうあれから十数年になります。当時、30代前半の私は、仕事も私生活も行き詰まって、暗礁に乗り上げていました。「このままじゃだめだ。何とかしなくちゃいけない。」と思ってはいましたが、具体的には何もできずに、お酒と煙草の力で、辛うじて心のバランスを保っていました。

職場では、同僚に対する不満で自分を見失いかけていました。手柄を欲しがらただけで責任は取ろうとしない上司、お世辞だけは上手な同世代の同僚、仕事はせずに権利だけ主張する女子社員。私はいつもイライラしていました。

私生活では、子どもに恵まれないことが、私たち夫婦の大きなストレスになっていました。病院で診察を受け、自然妊娠で子どもを授かる可能性がほぼゼロであるということを知らされ、2人で落ち込んでいました。「子どもまだなの？」って聞かれるたびに、悔しくて辛い思いをしていました。

心の落ち着くことのない、苦しい日々が続きました。宮本輝さんの『人間の幸福』を読んだのは、そんな時です。主人公は、40代前半の誇りを失ったしがらないサラリーマンです。自分の人生の先が見えて、すべてに投げやりな状態です。子どもはいません。奥さんが40歳になった時点で、子どもはあきらめたという設定でした。

読み始めた時、「これは10年後の俺の姿？」と私は思いました。自分の将来が描かれているような気持ちになって、最後まで一気に読みました。

物語が、まさにクライマックスに入ろうとする部分です。その主人公が風呂の中でこれまでの出来事を振り返り、「自分が変われば、いつしか自分を取り巻く世界も変わっていく。」とつぶやく場面があります。私のお気に入りの場面です。何度も読み返しました。この後、主人公の男性は少しずつ変わっていきます。読み終えた後に、清々しい読後感が残りました。

この本は、澁んでいた私の心に新しい風を吹き込んでくれました。私は、自分をいい方向に変えるための努力を始めました。「自分が変われば周囲も変わる」という言葉を信じて、変わるための努力をすることにしました。

まず他人と接するときは、その人の優れた点を探すようにしました。頼りないと思っていた上司が、思いやりのある優しい一面を持っていることが分かりました。完璧な人間はいませんが、すべてが駄目な人間もいません。やがて、他人の長所を探すのが楽しくなってきました。「この人は、こんな優れた一面を持っているのか！」と驚き感動し、その事実気づくことができた自分を誇りに思うようになりました。

自分に任された仕事は、どんなことでも手を抜かずに全力で取り組むようにしました。無駄な仕事は何一つありません。どんな仕事もすべて役に立つのだと信じ、常に全力で取り組みました。

当時の私は、よく誰かと自分を比較して、落ち込んでいました。これは、エネルギーの無駄です。「自分には自分にしかできないことがあるのだから、卑屈になる必要はない」と信じるようにしました。自分自身を卑下するのは、今思えば、無意味で愚かな行為です。

子どもについては、奥さんと話して、不妊治療を受けることを決めました。思うような結果が得られず何度も辛い思いをしましたが、信じる気持ちだけは忘れませんでした。

先日、私は46歳になりました。今も、毎日の生活の中で、様々な悲しみや不安に直面します。これは、生きている限りずっと続くのでしょうか。悲しみや不安で押し潰されそうになった時、私は子どもの寝顔に向かって話しかけます。

「さっちゃん、ゆう君、僕の子どもとして生まれてきてくれてありがとう。」

すると、不安で押し潰されそうになっている私の心は、ずっと穏やかになるのです。どんな心配事や悩み事も、何とかかなりそうに思えてくるのです。

私は今も様々な本を読みます。時間があれば、書店や図書館に足を運びます。たくさんの素晴らしい本に出会いました。心に残る本がいくつかあります。でも、宮本輝さんの『人間の幸福』を超える本には出会えていません。

何も心配することはない。感謝の気持ちを忘れることなく毎日を丁寧に生きていけばすべてはうまくいく。幸福になるために、特別なことは何も必要ない。私にそう思わせてくれた唯一の本です。